



ARIMASS Letter

[Association for Risk Management System Studies]

危機管理システム研究学会 2013年9月 第54号

HP <http://arimass.jp/>

科学技術リスク研究(社会・人間・科学技術の相関)分科会の 設置にあたって

科学技術リスク研究(社会・人間・科学技術の相関)分科会
世話人 宮林正恭

このたび、科学技術リスク研究(社会・人間・科学技術の相関)分科会が設置され、その世話人をお引き受けすることになりました。どうかよろしく願いいたします。

その設置の趣旨については、設立趣意書に、

「科学技術の進歩発展は、原子力、ライフサイエンス、情報科学技術などの先端科学技術において特に顕著であるが、人間生活を豊かにし、人間社会に多くのメリットをもたらしていると言える。しかし、一方では人間および社会に多くのリスクをもたらし、それが発現して危機になることも少なくない。自然災害においても、それに対応するための知識をもたらすと同時に、その知識の適用を誤ると、逆に人間および社会にとってはリスクとなることもある。今や科学技術の成果としての製品やサービスは一般社会において不可欠のものとなっており、人間や社会に与える科学技術の効用とリスクの問題は大きな研究課題と考えられる。本分科会は、この問題について調査研究を行い、必要に応じて積極的にその成果を世に問うていくことをねらいとして設置する。」とあります。

分科会の活動の具体的な中身は、今後、分科会で検討されますが、分科会設置の推進者として、その背景にあった「思い」を述べれば次の通りです。

2011年の東日本大震災および福島第一原子力発電所事故は、我が国社会及び国民に未曾有の被害をもたらしました。我々は、科学技術とリスクの関係についての見通しを誤り、このような経験
(次ページに続く)

目 次

巻頭言：科学技術リスク研究(社会・人間・科学技術の相関)分科会の設置にあたって…… 1	学会員の学位・論文・新刊書のご紹介…… 10
企業活性化研究分科会 主査就任のお知らせ…… 2	お知らせ ～ 「リスク随筆」募集 ～…… 11
ARIMASS 研究年報論文募集について…… 3	事務局からのお知らせ…… 11
分科会報告…… 4	編集後記…… 12

をすることになったわけですが、これを2度と繰り返さず、しかも、「恐れ」ばかりに着目して体力を超えた投資を行ったり、日本から脱出するしかないという結論になったりすることにならないように、科学技術とリスクの関係についてしっかりとした考え方をもち、的確な対策をとることが必要です。もちろん、リスクや危機を取り扱うリスクマネジメントあるいは危機管理（筆者はこれらを統合してリスク危機マネジメントと呼んでいます。）の能力を身に着けることが必要であることは言うまでもありません。

科学技術の成果が具現化したものとしての製品やサービスには、ある程度のリスクが伴うことは避けられません。その製品やサービスに関与する人間は、グローバルな利用の進展によって、空間的にも、時間的にも、領域的にも膨大なものとなり、日々変化しています。供給サイドだけに限ってみても、次々と創出される新ビジネスモデルによって関与者の中身が変化してきています。このようなことから、科学技術とリスクの関係そのものも、変化しているかもしれません。

科学技術とリスクに関する理解は、企業の海外投資や技術のライセンス契約、研究体制の構築の仕方、研究の進め方、大学人をはじめとする専門家の生き方等に対し大きな影響力を持っているはずです。先端技術ベンチャー投資などは科学技術とリスクに関する理解なしに行なえない事業でしょう。

近年の我が国は、科学技術を含めいろいろな領域で国際競争力の低下が意識されるようになっていきます。そして、その低下要因として、①リスクを取ることに消極的、②リスクをうまくコントロールできない、③リスクが発現し危機になった時の対応が不得手、などが論じられることが少なくありません。中国や韓国の急速な台頭、ドイツの隆盛、アメリカの復活など最近の動きをみると、社会科学分野を含めた科学技術の競争力の維持と増進並びにその際のリスクおよび危機の取り扱いの巧さはわが国における最重要課題の一つであると考えられます。

企業活性化研究分科会 主査就任のお知らせ

企業活性化研究分科会

主査 山本洋信

当分科会は2007年3月、当学会元会長の太田三郎先生（千葉商科大学）と山本洋信の両名からの呼びかけで、各分野の方々を招集し、13名の分科会を新設した。変化する経済環境の中、自己の所属する企業の継続的発展に役立つことができる人材となることを目指し研究を進めている。この人材育成ともなる研究活動は、本学会の基本的使命である「社会貢献を為すことができる学会」となるといえる。

現在、当分科会の在籍者は23名であり、会員構成は大学院生諸君から業界の権威ある方々である。このような状況を鑑みて、当分科会では「企業リスク」を基軸として研究を進め、企業の健全な発展、維持、存続を図るために、共同研究などを通じて、事業を取り巻くリスクを科学し、実効性のあるリスクマネジメント議論・検討をしている。

当分科会は、財務諸表分析を中心とした倒産分析研究から、企業の再生分析研究へと展開し、一ヶ月に一社の割合で研究活動を行なっている。分析対象企業は、年度始めに10社程度を抽出し、有価証券報告書等のデータを、CDにして会員全員に配布し、事前検討を行なうことにしている。研究活動の内容については、上場企業の有価証券報告書をもとに、一社につき平均15期分（分量は一期分

150 ページ前後) を、財務分析の資料として 5~10 ページにまとめている。それをもとに、分析対象企業の経営の現状・変化・今後の方向性のあり方など考察し、報告する。報告後、参加者からの質疑応答を踏まえ、企業のあり方について活発な討議を行なう。そのために、報告担当者は報告にいたるまで最低 15 時間から 20 時間かかり、また出席者全員も同様に行ない、分科会主査でも同じことである。

これからの当分科会は、2つのことを強化していく。まず、新規入会を増やし、組織強化を行なう。次に、企業活性化に必要な理論と実践のために研究内容の充実を行ないたいと考えている。そのため、新規入会希望者の方には、当分科会の研究の進め方をお話し、ご理解をいただいたうえで入会をお願いしている。研究者の方々はすぐに入会して参加いただくが、討議内容がわからないなどのレベルの方は、参加出来るまでの事前学習を課している。事前学習の時間は通常 6 ヶ月から 1 年かかり、その間は主査を中心に別途、基礎研究の支援をしている。

今年度の予定は、10 月度以降はシャープ(株)・エルピーダメモリ(株)・(株)中山製鋼所等の 6 社を検討し、企業の再生分析の総括を行なっていく。加えて、再生戦略、不祥事などの理論研究を継続的に行なう。

ARIMASS 研究年報論文募集について

論文審査委員会

2014 年の ARIMASS 研究年報論文を募集します。これまでも増して充実した研究論文、報告文の応募をお待ちしております。

投稿を希望される方は、当学会 ARIMASS 研究年報に掲載されている“論文投稿の手引き”に従って論文を作成され、お送り下さい。

※「研究年報」の質的・量的充実が、学会の価値向上に直結すると考えております。

奮って応募頂きますようお願い致します。

ARIMASS 研究年報論文募集要項

- 【送 付 先】 危機管理システム研究学会事務局
事務局 E-mail: office@arimass.jp
- 【投 稿 規 程】 研究年報に掲載されている“論文投稿の手引き”による
- 【締 切】 2013 年 11 月末日
- 【論文集発行】 2014 年 6 月予定

分科会報告

【RMS（リスクマネジメントシステム）研究分科会】

主査：指田 朝久（東京海上日動リスクコンサルティング）

（1）WG 活動計画

2013 年（平成 25 年）度は基本的には 2012 年（平成 24 年）度の活動を踏まえた活動を継続させていきます。昨年度開催いたしました、「ISO31000 研究 WG」、「リスクマネジメント事例研究 WG」を引き続き実施します。「ERM 研究 WG」については秋から活動を再開します。基本的にはこれらの各 WG はそれぞれ 2 ヶ月—3 ヶ月に 1 回程度の WG を開催し、打ち合わせとメーリングリストの意見交換により研究を進め、年度末には 1 年間の研究報告書を作成いたします。WG メンバーの募集は大会にて趣旨説明とアリマスレターでの呼びかけにより行います。なお、ISO31000WG は報告書をまとめたところで一旦修了し、次の規格の研究 WG を新たにスタートする予定です。

ISO31000WG は 9 月 2 日に今年度の第 1 回の WG を MS & AD 基礎研究所で開催しました。次回は 10 月 21 日月曜日です。事例研究 WG および ERM 研究 WG も順次開催していきます。

（2）年次大会での発表

例年通り活動結果につき年次大会で発表を行います。2014 年（平成 26 年）大会にむけて「ISO31000 研究 WG」、「リスクマネジメント事例研究 WG」、ERM 研究 WG の活動成果を発表いたします。特に ISO31000WG はいままでの研究の集大成を発表する予定です。

（3）メーリングリストによる意見集約

研究分科会の活動そのものは各 WG の会合で実施いたします。活動内容はその都度リスクマネジメントシステム研究分科会全体のメーリングリストで情報交換を行います。研究会に出席出来ない場合はメーリングリストによる意見交換を歓迎します。

この研究分科会は今年度は 3 つの WG が並行して活動しますが、各々の WG は別個に存在するのではなく、リスクマネジメントシステムの研究の方向性について統一されてこそ意味があるものであることから各 WG 間の相互の交流も歓迎します。メーリングリストは参加不参加の意思確認を総会終了後の毎年活動開始に合わせて実施いたします。

（4）ホームページの拡充

分科会のホームページを拡充しました。各 WG の開催予定をホームページに都度掲載いたしますので、WG に参加されたい方は開催予定をご覧の上気軽にお声をかけいただければと存じます。また、学会発足当時から RMS 研究分科会の報告書を順次ホームページに掲載し、多くの方にご覧いただけるように充実していく予定です。

以上

【リスク事例サロン分科会】

主査 小島 修矢(クエスト コンサルティング ロンドン)
事務局 有賀 平(MS&AD 基礎研究所)

「リスク事例サロン分科会」はマスコミ等で取り上げられた事件や危機事例を題材に、会員間で自由に危機管理・リスクマネジメントの観点から情報交換や意見交流を行うことを目的としています。

本分科会は開催の都度参加者を募り、サロンと言う名前のおり、飲食しながらテーマに関連して自由に意見交換を行う会費制の分科会です。

今回は、第 65 回の報告をいたします。

第 65 回(2013 年 7 月 19 日(金)午後 6:30~8:30、於 東洋経済新報社 9階会議室)

1. 参加者(9名): 竹中、笹子、龍崎、出崎、辻、吉川、長井、北澤、小島、有賀 ※敬称略
2. テーマ: リスクと危機のマネジメントの体系化
3. 報告者: 宮林 正恭 氏 (千葉科学大学)
4. 報告内容骨子

リスクや危機に関するマネジメントはそれぞれの必要性からいろいろな形で発達をしてきている。しかし、もう一段の発展を遂げるためには、その全体としての体系化が必要である。

組織にとって、使命や目的の達成が目標のはずであり、目的の達成のために必要であるならばリスクを取るべき。ただし、致命傷を被ることなく、できるだけ損害を少なくする努力は必要だと考えている。

リスク段階から危機段階に至るまで全体を一体的システムとして統合的に考え、できるだけ損害を少なくする努力を行うことになる。また、管理ではなくマネジメントとして考えるべき。

リスクおよび危機の取り扱いに置いては、共通的、基礎的考え方を基盤とし、各個別分野のリスクや危機は、その応用問題とすれば良いと思う。

人間の行う行為であり、人間の心理的要素および弱点に強く着目リスク危機マネジメントの活動は、動的なものであり、常に変化する状況に対応する必要があるものとして考えるべき。

基本的アプローチ手法のモデルを活用しながら、PDCA サイクルを活用することで、より適切なリスク危機マネジメントが行えると考えている。

リスクの評価を確率ではなく、リスク量で考える。

5. 自由意見・情報交流内容(要旨)

- 「トップダウン」と「リーダーシップ」という言葉が誤解されていると思っている。例えば、「トップダウン」は、細かいことまで上司が指示するものと考え、「指示待ち文化」を産んでしまった。「リーダーシップ」も欧米でのそれとは異なった行動がとられていると感じている。
- 日本は経営者と言っても従業員が単に昇進した場合が多く、経営者としてのリーダーシップを育成する機会がないし、能力も身につかない。
- 現状では、平時のマネジメントの仕組みを危機時にも適用してしまっていることが多い。
- 様々な「理屈」が主張や説明をされているが、きれいごとではリスク管理は出来ない。現場の感覚では、

リスク理論を現実に当てはめることが非常に難しいと感じている。

- リスク管理に要する費用は、当期利益には寄与しないため、平時にこれを推進することは難しい。
- 啓蒙を続けてはいるが、危機時の行動すること重要性を理解している経営者が、依然として少ない。
- 経営者自身も、部下が進言することを待つだけの姿勢であることが多い。どのような施策が必要であるかを含め、従業員に対して積極的に問う姿勢が必要と思う。
- これまでの実態をみると、日本の組織では、危機管理を重要視する人は専門家となり、経営のトップになれないといった実態がある。それどころか、率直に進言する社員が疎まれて、組織から排除されてしまうこともある。
- 危機対応に関する経営者教育が不足している。
- 学校教育を含め、教育過程の中でリスクに関する学習を行っていないことが、リスクマネジメントの軽視につながっているとも言える。昔は歴史書を読むことでこうした知識を身につけて、教育課程にないことを補ってきたが、最近では歴史書も読まれなくなっている。
- リスクを管理する能力を強化するには、若い時期にリスクを経験し、修羅場を経験することが不可欠だと感じている。
- 危機対応を具体的に考える時には専門家の協力も必要だと考えている。
- 危機対応の必要性を法律的に強化する必要があると思う。
- これまでは、中間管理者の中に、彼らを取り巻くリスクを正確に把握している人材がいたが、今はこうした中間管理者が極めて少ない。それ故に、具体的な仕組みまでも文書で作らなくてはならない。
- 仕組みを作るだけでなくこれを実行できる人材を育成していく必要がある。

以上

【MRM（メディカルリスクマネジメント）分科会】

主査：藤谷 克己（日本医科大学）

日時： 2013年7月11日（月曜日）18時30分～20時00分

場所： 文京学院大学 K206 会議室（本館）

出席者： 寺本、辻、内田、綾部、野村、中村、吉川、俵積田、伊藤、長井、藤谷

テーマ： 医療事故防止活動が行き過ぎると「あれ？」と思うような過剰な結果を生む傾向にあると演者の俵積田先生は指摘する。そういった行き過ぎた不自然な例を紹介し、事故防止活動の意義について原点を問い直す議論をMRMメンバーで行った。勉強会後には恒例で懇親会を行い、さらに議論を深めた。

事例紹介：“これっておかしくありません！”

演者：昭和大学保健医療学部 看護学科基礎看護学 俵積田ゆかり先生

1. とある病院内での事故
2. 行き過ぎたKYK（DVD鑑賞）
3. 病院内のちょっと変な活動
4. こんな学生がいます

以上

【企業活性化研究分科会】

主査：山本 洋信（アップライフシステム研究所）

※ 6月度の定例分科会は、立教大学での年次大会により休会

<第五十九回 2013年7月6日(土)時間：13:30～17:00 於：専修大学(神田校舎)>

1. 参加者：井端、杉本、夏目、浜田、宮川、山本（6名）

2. テーマ：再生企業の分析・2013年度分析企業 その1

・ルネサスエレクトロニクス社の場合

・報告者：宮川 宏 ・配布資料：12枚

・報告の要旨：

本報告は、企業業績の悪化により危機に陥り、いまだ復活の兆しが見えてこないルネサスエレクトロニクス社(以下、同社)の分析をおこない、企業業績が悪化した企業がどのように再生したのか否かを検討し、再生の方向性を考察している。

はじめに、同社における外部環境と内部環境の状況を整理したうえで、そこにかかわる問題点を検討した。外部環境の問題は市況変動の影響、半導体市場の国内外競争、競争による利益率の悪化、主要顧客への依存度が高いことの4点あると指摘した。また、内部環境の問題は製品の特質、生産プロセス、事業部門別の採算性、下請け体質の強い傾向、企業結合による過剰な生産設備の所有、ガバナンスの問題を取り上げ特徴があることを考察した。

次に、収益性分析をおこなった結果、Mの値をみれば低いマージンであり、利益がでる体質ではないと考えられ、下請体質から抜け出せず、採算管理の甘さを指摘した。また、Tの値をみれば、下請体質、過剰設備など採算や効率を考えていないことを指摘し、経営資源の効率的利用を進める必要があることを分析した。

最後に、上記の検討課題を踏まえたうえで、ターンアラウンド前略の観点から再生分析をおこなった。その結果、同社は2006年3月期以降からコスト削減、資産削減などの縮小戦略をおこなっている。2011年3月期ころからは、縮小戦略と復帰戦略を同時に進行していると推測した。加えて、直近4年間の復帰ポイントを整理してみると、2012年3月期、2013年3月期において、収益性や成長性の改善をみせている傾向にあることを明らかにした。これからの同社は、成長性、収益性にかかる課題をクリアしてから、再生の道が見えてくると考察した。

3. テーマ：2013年度の対象企業と担当者の検討

<第六十回 2013年8月24日(土)時間：13:30～17:00 於：専修大学(神田校舎)>

1. 参加者：石川、井端、大野、杉本、小林、高市、辻、夏目、浜田、星野、宮川、山本（12名）

2. テーマ：実務家にとっての情報収集と論文の書き方

・講演者：辻 純一郎 ・配布資料：25枚

・講演内容の要旨

本講演は、辻純一郎(危機管理システム研究学会 副会長)氏から各会員の知見を広めるために、

実務家にとって効率的な研究の進め方と論文の書き方について、4つのポイントを提示したものである。

第一に、情報収集のポイントについて顕示している。有益な情報収集を行うためには、目的意識とあらゆる情報に接す機会を持ち、社内外からの情報収集の仕組みを整えるポイントを示した。また収集した情報には生情報と加工情報があり、それぞれ特質が異なるため、特質を意識し、見方を変えて情報の中のヒントを探し出すことである。加えて、資料の量と質については、質重視で、短時間で資料収集と分類を行うことを示している。

第二に、文章の書き方について論及している。まず論文などの文書を書くときは、自分のスタンスを決め、伝えたいコンセプトの明確化をしてから、内容の整理を行ったうえで書き始めること、次に、主語と述語の一致、余計な修飾語の「カンナかけ」をして、文書の精緻化をはかることで、分かり易い文書にする。最後に、内容の論理性、内容の正確性、引用文献の厳選の3つを検証することをもとめている。

第三に、研究テーマの選定においては、切り口を考え、関心を持ったテーマについて先行研究を調査し、議論の余地を探ることである。研究テーマの議論方法には演繹法と帰納法があり、研究テーマにより選択および検討することである。帰納法の場合には、注釈を用いて、自己の論理の客観性を持たせることが大切であるとした。

第四に、研究の進め方については、仕事も研究も進め方は同じであり、問題解決の巧拙には段取りを考慮すべきである。効率的な研究の進め方には、状況把握、原因究明、選択と決定、リスクへの対処の各段取りをつけ、取り組むことをポイントとして取り上げた。

これら4つのポイントを踏まえて、研究に取り組み、実行することで、効率的な研究を行うことが可能となる。最後に、論文、レポートなどは、自ら書いて知識不足を知り、その不足を補充して論拠を深め、良い論文を書き上げていくこととした。

以上

【価値ベース・リスクマネジメント研究分科会】

主査：藤江俊彦（千葉商科大学）

<第33回>

1. 日時、場所：2013年6月25日（火）時間：18：30～20：30 於：千葉商科大学
2. 参加者：9名
3. 報告：佐藤 綾子氏（千葉商科大学）
テーマ「地方自治体の財政評価機能の構築に向けた課題～リスクマネジメントの視点から～」

<第34回>

1. 日時、場所：2013年7月30日（月）時間：18：30～20：30 於：千葉商科大学
2. 参加者：7名
3. 報告：青淵 正幸氏（立教大学）
テーマ「不適切な会計処理を行った企業の株価に関する研究」

以上

【科学技術リスク研究（社会・人間・科学技術の相関）分科会】

科学技術リスク研究(社会・人間・科学技術の相関)分科会の設置と活動について

世話人・宮林正恭

この分科会は、辻純一郎会員および宮林正恭会員の申し出により、7月20日の常任理事会において設置が決定されたまだ新しい分科会です。

この分科会は、

「科学技術の進歩発展は、原子力、ライフサイエンス、情報科学技術などの先端科学技術において特に顕著であるが、人間生活を豊かにし、人間社会に多くのメリットをもたらしていると言える。しかし、一方では人間および社会に多くのリスクをもたらし、それが発現して危機になることも少なくない。自然災害においても、それに対応するための知識をもたらすと同時に、その知識の適用を誤ると、逆に人間および社会にとってはリスクとなることもある。今や科学技術の成果としての製品やサービスは一般社会において不可欠のものとなっており、人間や社会に与える科学技術の効用とリスクの問題は大きな研究課題と考えられる。本分科会は、この問題について調査研究を行い、必要に応じて積極的にその成果を世に問うていくことをねらいとして設置する。」（設置趣意書）

との趣旨の下に設置されています。

この直接のきっかけは、本年6月1日の第13回年次大会において「リスク危機管理など新しい観点からの技術の特性に関する研究」と題するテーマセッション行ったところ、何人かの会員から、「1回限りのテーマセッションでおしまいとせず、引き続き、分科会を設置してこのテーマを学会として研究をしたらどうかとのお話をいただいたことにあります。そして、そのテーマセッションのファシリテーターを務められた辻純一郎先生と解題説明者を務めた宮林が相談し、分科会の設置をお願いいたしました。幸いにも、藤江会長をはじめとする常任理事の皆様がたの積極的なご支持をいただくことができ、短時間のうちに発足することができました。

この分科会については、辻先生のご指導とご支援をいただきながら、宮林が世話人を務めさせていただきます。

この第1回は、夏休み前に開くことを好ましいだろうということで、7月29日に、政策大学院大学において、同じく本問題について関心のある研究・技術計画学会政策分科会との合同会合として開催いたしました。急なことだったにもかかわらず、当分科会関係者として10名の方に出席いただき、盛会のうちに会を終えることができました。（政策分科会からの出席者は5名でした。）第1回目ということもあって、基礎的なところを明らかにしようということで、科学技術哲学およびSTS（科学技術社会学）の観点から専門家にお話を伺いましたが、ややアカデミック過ぎたのではないかと印象があったのではないかと存じます。

この分科会は設置決定後、かなり急に第1回の会合を開いた後、夏休みの期間に入りましたので、その運営については、ほとんど何も決まっていなくて過言ではないと思います。

今後の進め方については、分科会メンバーの方々と相談をしながら決めていくことになりませんが、世話人としては、この研究に役立つ勉強会などをやりながら、メンバー間の意見調整を図っていき

いと考えております。これまでの他の分科会の例では、隔月ぐらいのインターバルで会合を持つことが多いように思われますので、とりあえず、今後、次のような会合を持つことを考えています。

- ① 本分科会の今後の進め方に関する議論
- ② 医療および医薬品の領域におけるリスク危機マネジメント問題の議論
- ③ 日本企業の技術の取り扱いと大学における科学技術に関する教育の問題等に関する議論

その後については、上述の意見調整の状況を見ながら考えていくこととなります。

なお、このように未確定な部分の多い状況にありますが、アリマスレター編集部からのご要請もあり、すべてが決まるまで何も情報発信がないのは新設の分科会としては好ましいことではないとの判断から、この分科会の設置を常任理事会にお願いするにあたっての現世話人の「思い」を9月発行のアリマスレターに書かせていただきました。これはあくまで世話人の個人的思いであり、今後、分科会での議論を通じて大きく変わる可能性があるものと思われまます。ただし、何らの参考になれば幸いです。

以上

学会員の学位・論文・新刊書のご紹介

著書名： 実践事業継続マネジメント第3版

著者： 東京海上日動リスクコンサルティング㈱

著者略歴： 指田 朝久 他共著

危機管理システム研究会常任理事

東京海上日動リスクコンサルティング株式会社

上席主席研究員

内容：

2006年に第1版を出版し今回が第3版となる。企業の事業継続計画の考え方および実際の構築や維持管理の具体例をまとめた。東日本大震災やタイ水害の教訓を踏まえ、事例を大幅に差し替えを行い、事業継続についてもビジネスインパクト分析とリスク分析をより分かりやすく整理し、代替戦略の重要性やサプライチェーンの対応についてもより詳しく記述している。国際標準規格 ISO22301 の認証制度の動向や事業継続に関する資格制度にもふれている。



出版社	同文館出版	単行本	252ページ	発売日	2013. 1. 25
ISBN-10	ISBN978-4-495-37643-7	ISBN-13:		価格	2300円+税

お知らせ ～ 「リスク随筆」募集 ～

広報・編集委員会

昨今リスクを強く意識されるニュース・事件が多発しております。こうした状況に対して、当学会でも分科会活動とは別個に本誌を通じて気軽に様々な意見や議論を交わすことが必要ではないかと考えました。

そこで「リスク随筆」を企画いたしております。当学会には、それぞれの専門分野の先生のみでなく、実務家の先生方も多数在籍されております。こうした当学会の特徴・強みを大いに活用し、専門分野を超えた意見交換や議論ができれば、有意義な提言が可能であると考えております。つきましては、下記の通りリスク随筆を募集いたします。

リスク随筆の募集要項

テーマ 「リスク」に関連することであれば、何でも結構です。

募集期限 随時

掲載時期 毎号のアリマスレターにて

投稿要領 A4判1ページ程度(1000字程度を目安)

採用可否 広報・編集委員会にて審査の上、掲載の可否を判断させていただきます。

応募方法 下記応募先にメールにてご提出ください。

応募先 広報・編集委員会 E-mail: office4@arimass.jp

<事務局からのお知らせ>

1. 分科会連絡先

教育実践分科会

主査:後藤 和廣

Tel.03-3291-8921

E-mail:gotokaz@aol.com

リスクマネジメントシステム研究分科会

主査:指田 朝久

Tel.03-5288-6584

E-mail: t.sashida@tokiorisk.co.jp

リスク事例サロン分科会

主査:小島 修矢

Tel.047-338-6185

E-mail: kojimash@mb.infoweb.ne.jp

メディカルリスクマネジメント分科会

主査:藤谷 克己

Tel.03-5803-4513

E-mail: fta-hcm@nms.ac.jp

企業活性化研究分科会

主査:山本 洋信

Tel.048-874-4491

E-mail:rsa31447@nifty.com

価値ベース・リスクマネジメント研究分科会

主査:藤江 俊彦

Tel.047-372-4111

E-mail: fujie@cuc.ac.jp

2. 新入会員紹介

氏名	所属
山崎 康夫	一般社団法人中部産業連盟

3. 住所・所属等変更の連絡方法

会員各位の自宅のご住所・電話番号・所属機関の名称・所在・電話番号・職名等について変更の生じた場合には変更前と変更後を併記のうえ必ず文書・メールにて事務局宛にご連絡ください。

【編集後記】

アリマスレター54号の発行予定時期に前後し、企業活性化研究分科会の主査が交代されました。これによりHP掲載の一時延期、掲載原稿の差し替えなどが発生し、発行が大幅に遅れてしまいました。お詫びいたします。

さて、広報・編集委員長を引き継いで2つ目のアリマスレターです。今回は、新しく設置された分科会と主査交代のあった分科会にスポットを当ててみました。いかがでしたでしょうか。

アリマスレターでは、毎号、分科会報告として各分科会の近況をご紹介いただいておりますが、その分科会活動の目的や目指している方向性などは、なかなか分かり難いのではないかと思います。ということで今後のアリマスレターでは、時々どこかの分科会にスポットを当てた特集を組んでいきたいと構想しています。

また、このこととも関連しますが、広報・編集委員会と各分科会との結びつきをさらに深めることで、分科会の情報発信などお役に立っていくことができるのではないかと考えています。そこで広報・編集委員会では、各分科会から委員を募りもう少し体制を充実させていきたいと思っております。

広報・編集委員として何かやってみたいとお考えの方、どうぞ長井までご連絡ください。お待ちしております。

広報・編集委員長 長井健人

E-mail: office4@arimass.jp

発行 危機管理システム研究学会

〒214-8580

住所: 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1
専修大学 1号館 1305 研究室

E-mail: office@arimass.jp

URL: <http://arimass.jp/>

発行日 2013年9月20日